宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊 26番
定価一年 送料共500円

宗像大社御用達
祭具、装束
結婚式場用品
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話 (37) 九三七二番
振替口座京都一五八九一番

初詣の人と車の絶ゆるまなく
御神威かしこし宗像の宮

初詣でに賑った正月祭

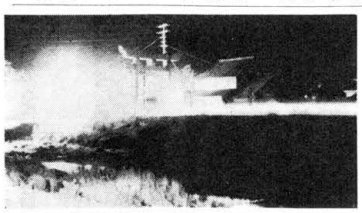
昭和四十一年一月一日午前零時去る年に別れを告げ、来る年を迎つるの刻、吾々は元旦の景観を撮影すべく鎮国寺裏山標高一〇〇米の山上にあった。見下せば眼下に釣川土堤の県道は、せきを切った様に車のライトが川面に反射しながら大社の方を指して流れて行く、その流れが境内に吸い込まれるや巨大な光の塊となり渦いている。その光の乱舞から目をはずし遥か北の方を望めば沖津宮、中津宮の鎮座ます玄洋は、太古さながらの静寂の中にあった。

同行のHがつぶやいた「今年は暖いなあ」今年か！なるほど時計は零時五分を指している。暖い、言われてみればほのぼのとした空気があたりを包んでいる、あながち社務所を出る時飲んだオミキのせいではないらしい。

鎮国寺山頂での撮影を終えて山を降る。待たせてあった神社の車で更に、国道三号線からの参道口附近の景観を写すべく東郷橋河畔に急行する。対面の車輌は全てが正月の〆飾りをつけている。上りの車線は一台の灯りもない。全部下り線で宗像神社へ向ってライトが続く。すれ違った車の助手席に島田が影絵の様に浮ぶ。三号線から東郷橋大鳥居に右折、或は左折して沿線は車が数珠連きに長蛇の列をつくる。

宗像神社まで約四キロの間を車が続くのは、元旦のこの時が最高であり、深夜に奏でる光の一大プロムナードである。Hが又云った。

「自分運だけで、この素晴しいシネマスコープを見るのは勿体ない」午前六時暁闇に東雲が流れる頃迄沿道にライトが途切れる事はなかった。



午前一時、大社境内では地元消防団員が警笛もすどく流れ込む車を巧みに整理して駐車場へと送り込む。神門横の新設の受付所は祈願者が殺倒して四人の受付が息つく暇もなく応対している。神札授与所の神饌舎の前にも人だかりが激しい。

午前六時元旦祭斎行、澄明の境内に、大太鼓の音がとろくに響き渡る。

神珎の装束は白一色である。古色蒼然とした社殿に白は清浄感を湧き立たせてくれる。「浄い！」この言葉がこの時程充実感をもって感じられた事はなかった。

久保宮司の祝詞が朗々と奏上された。

新年の年の始めの吉日を祝い、大御代の大御光が益々光被せられることを祈り、祭員、参列者一同拝殿に深く額いた。

午前七時初日が境内にさしそめた初日が車の上で、参拝者の肩の上でおどっている。「お目出度う」「お目出度う」所々で新春を慶びあう声が聞こえる。貸切バスが正面大鳥居前の駐車場に着くと、吾れ先きと急ぐ参拝者が反り橋を渡って来る。

午前十時より午后二時まで、埋立た旧心字池の駐車場は祈願車でうずまった。その上を祈願車呼び出しのマイクの声、楽の音が流れる。午后六時夕闇が境内を覆ってきた。心字池横の庭燎の炎が赤く人々の頬にうつっている。

かくして元旦は暮れた。翌二日、三日も参拝者は引きもきらず続いた。

正月三日間の参拝者は
一日　五〇、〇〇〇人
二日　四〇、〇〇〇人
三日　三〇、〇〇〇人

と予想された。昨年の一〇〇、〇〇〇人に比して二割近い増加である。この数を見ても如何に宗像大神の御神徳があまねく光被しつつあるかを目のあたりにして恐懼の極みであった。

年末年始には真心からなるお初穂料をご郵送いただきました。

右は昭和四十一年元旦大祭及び旧正月祭神前にお供えして皆様の御隆盛を祈願致しました。

ここに新年の祭儀を盛大に滞りなくご奉仕出来ましたことを御報告申し上げます。

宗像神全国総本宮
宗像大社社務本局
特別崇敬者各位

論説　勲無等の国民

神洲日本、金甌無缺の国柄と威張ってみても、国家の横暴無謀があれば、他民族に受け入れられる道理はない。太平洋戦争の惨敗は、敗れるべくして敗れたもので、貴重な犠牲を払った貴重な教訓として噛みしめてゆかねばなるまい。民族自決の時代である。如何に強圧が頭上に加えられても、弱少と称される民族も存立のためには、強烈な反抗を示す。ここ数年間の劣勢の民族の動向が、これを如実に物語っている。

武力を以って他民族を征服したのは、遠い昔の物語に属する。銃剣を突き出して、イエスかノーかと他民族を威圧する自己の足もとは、銃砲を放った瞬間に崩れ去るものと悟らねばならない。

欧州史上に於ても、フェニキヤを討滅したローマの将軍スキピオが「カルタゴ既に亡び、フェニキヤまた灰燼に帰しぬ、次に来らむものは、それローマか」と誓言したのである。祖神の啓示である。現代を生きる国民の自戒れえの警告でもあろう。

太平洋戦争勃発の当時、軍部をはじめ政界財界教育界の指導的立場にあった人達が、何の反省もなく、今日政府がくれる勲章を喜んで頂戴しているのに、少からぬ驚異の感を懐く。不可思議な世相とも思える。

勲無等の人々を想う。今は亡き愛児の墓前に、心ばかりの生前の好物を供えて、英霊安かれと祈る老母の傷ましさを涙なくして見過せるか。悲涙まさに滂沱。特攻隊という栄誉で飾って、春秋に富む若い学徒を死地に追ったのは誰か。これらの若人を辛苦して育てた親は誰か。皆勲無等の国民である。悲劇を作った人たちが勲章をもらう。悲劇の当人も、その親たちも、何の栄典も受けていない。勲無等の静りに黙って生きる国民の前に、どんな心境で勲章をぶら下げて現れるのだろうか。勲無等は最高の無形の国民勲章である。

戦争は勿論好ましいことではない。然し、戦えば死地の中に僅かの活路が残されれば、全滅の中に勝利はない。戦に勝って生き残る者がなければ、それは勝利とはならない。絶対死の特攻隊など考え出して、国家の次代を背負う若人の貴重な生命を、勝てない戦に散らして無謀は神仏も許さないと思える。

国家の危急は、何人も生命を捨てて救わねばならないが、同胞の殉難を甘じて見送った指導者等は、勲無等の国民に伍して、祖国の復興にのみ専念することが、英霊に対する萬腔の感謝ではないだろうか。

国家の進路を誤り、幾百萬の若人の貴重な生命を亡ぼしめて、各界の指導者責任者が平気で勲章の授与を喜ぶとは。英霊は笑うだろう。外敵の進駐、中国史の所謂城下の盟、祖国の運命を外敵の意志に委ねた人たちが、勲何等の勲章繁栄の原動力となるだろう。

戦後二十年、当時成年でなかった幼年少年たちに敢戦の責任はない。少くとも成年であった者は、特に各界の指導的立場にあった者は、幾百萬の尊い生命に対して、今日の平穏な生活を如何に感謝しているか。真に祖国日本の再建復興を考えるなら、先ずこの敗戦の犠牲を甘じて見送った指導者等の心構えが必須であろう。

国民すべて、勲無等で、英霊の殉国の悲劇を偲びつつ、祖国の発展、国民の福祉に心してゆこうではないか。所得倍増などという人気とりの甘い政策題目ではない。

太平洋戦争の貴重な教訓に、耳を塞ぎ目を閉じてはならない。歴史の示す現実を真視して、国民的反省を忘れないことが、明日の国家繁栄の原動力となるだろう。

（白雲）

阿蒙少言

冬来たりなば春遠からず。正月から米一粒づつ日が長くなると、少年の頃老婆から教えられた。米一粒の表現を面白いと思うが、今の少年にこの表現は通用すまい。タイムと物質とを混同する頭の悪さを笑うだろう。ともあれ春の足音は何となく胸ぶくらむ感じ。福は内鬼は外の節分、この行事も春への意慾的な希望を与えてくれる然し、少し理窟を言うと、鬼が外にあっては、内の福も安泰ではなかろう。内は景気の回復、外はベトナムはじめ国際紛争の好転を念願する。「父は尾張の露と消え、母は平家に捕えられ、兄は伊豆に流されて、おのれ一人が跛馬山」と少年源義経をうたった唱歌があった。悲々惨々これでは牛若丸もひがみの多い少年になっただろう。これが後年、兄の頼朝との確執の因をなしていると見られる。少年をひがましてはなるまい。授業料が高くなる。親の生活が苦しくなる。少年の心理はひがみを描いてゆく。佐藤さんは次代の国民育成にエイサクを、案出してくれることを期待する。刻下の急務これ以上のものはない。昔は学徒の内職を苦学と言った。今はアルバイト。苦学時代は貧しい家庭に育った秀才が、青雲の志捨てがたく、人力車を引いたり、良家の庭掃除をしたりで、勉学に努めた。苦学の中から幾多の優秀な人材が産れた。現代のアルバイトは映画代かせぎなど、青雲の志とは違ったものがある。親練が贅沢欲求に変った感。これではいけないと指導者は名案を考えて欲しい。マルクスが日本に生れていたら、わが国の産業界の新しい指導者となっただろう。わが国の産業界の劃期的指導者がロシヤに生れていたら、マルクスになっただろうと瞑想する日がある。違うかな。

（白雲）

第五十七回　宗像大社献詠歌会詠草

一月十六日　於社務所詠草到着順

大　濠　江崎　琴子
わが庭にきのふも今日もおとつ日も羽根美はしき鳥のとび来る

村山田　吉田佐市郎
静けくも明け渡りたる座士神の大注連縄に初陽かがよう

名　残　竹原　円
声あらく呼ばれて出れば貸店の正月の客は酔いていけり

勝　浦　永島　桂翁
やうくに辿りついたり久寿台奥に百山ほゝ笑みてまつ

香　椎　織田　稼雨
今めかぬ手ぶりかしこ年ほきの御注連かざりぞいかにゆかしき

〃　神　湊　隣船　俊
鉄で木の力を尽しすべし石庭のおちつきおのが心も

厚　狭　篠田　南洞
朝餉に残れる種を垣添いに撒くも気付から社宅住いは

福　間　井原　元彦
子に乳をふくませながら小さき爪を検査してゐる妻たのしそう

宗　像　八波　五月
曰杵なる石のみほとけきさみたる人やさしかり紅さし給う

〃　片山　一
青田中遠くに見ゆる送電管日々として排口敬く

吉　田　占部　由久
初詣の人と車の絶ゆるまなく御神威かしこし宗像の宮

福　間　森　八蔵
新玉の注連ふく風の神殿に御代安すかれと祈る民草

大　濠　江崎　琴子
新代のこころ清と屠蘇くみて祝ぎ言かはす弟とおうなと

大　井　安部　重郎
あけぼのゝわがめ国のかなめたる郷に生れて東おうがむ

〃　安部　静子
家族揃ひ新しき年迎えんと子等三人も遠く来れり

〃　吉田　杏子
初春を迎え用意もとゝのいて心静かに聞く除夜の鐘

〃　木原　房子
故郷を海辺に近く持つ故や、こよいの風も潮騒に似し

江　口　辻野　開造
逝く年をおけなきこと反省し希望にもゆる年を迎へん

門　司　永島　まち
けふもまた師走の町に少年をがしさまよう保護司のわれは

吉　留　白木うめの
朝霜の白きを踏みて引きい出す存牛の息はあらくあたゝかし

戸　畑　伊規須ゆき
傷痕を洗ひし猿が発見せる湯の俵山猿を祀れり

勝　浦　永島　計七
その父に似たる青年大八びて里帰りせるを元旦に見る

津屋崎　麦野　時雄
伊勢宗像熱田神宮と三社のみの「えと守り」受く初詣でして

〃　白石百合蔵
病めど吾れなお生きてあり極月のベッドの冷を身に感じつゝ

勝　浦　永島　文子
祝うたと元気溢るゝ子等の声十日恵比須の浦の風習

遠　賀　藤崎保五郎
病棟の煤掃かれ患者等の焚火かこみてたゞわれて居り

若　松　大高　岩吉
久々に故郷帰りの楽しさよ青少年の友と語らい

陵厳寺　真鍋　万三
八十九齢使ひ古びし匙のかなだ遺物なし唯手歓の跡

深　田　中野　節子
初めてのポーナスさいて吾原具れし皮手袋はいと楽しかし

厚　狭　篠田　南洞
新春と言えば河原を翔い鶴鴇の羽も真白に輝きて見ゆ

宮　田　北原　君子
手不足と雨にたゝられ年末まで乾燥機の音心せわしも

〃　片山　朝子
うるわしき声もて歌わば哀しみの半減するもと若き日のあり

門　司　永島　哲夫
おのもく撞きたる除夜の鐘もすみ歌会の席に坐こみて座す

香　椎　桜井　秀
残り咲く荒地野菊の花一つ淡々と秋の蒙古家の上

〃　桜井　ツ子
山茶花の白きかびら昨日の夜のしぐれに濡れて年たつあした

九　大　力丸　登
ふとしたる病に倒れ二年の春を迎えていつなるやら

（四頁へつづく）

次男は神縄で戦死して帰らなかった。ごぜん様の憤激やる方ない。終戦とともに米軍の進駐してごぜん様奉仕の神社の裏山に、何かの陣地を構築した。如何に我意を通すごぜん様も、敗戦と米軍の来寇には勝てない。目をつぶって彼等が村内を濶歩する姿をじっと我慢したようである。

かって日本軍はなやかなりし頃、H航空隊の海軍兵がごぜん様の近くの旅館に来て荒れた時、急報に接してやむにやまれず、飛び出してごぜん様の鉄腕は海軍水兵を伸びさせてしまった。基地の司令官からやかましい談判が始まるものと、関係者はことのなりゆきを憂慮したが、ごぜん様は酒面にうけた些少の傷を治療しながら平気の平然である。

負傷して伸ばされた水兵等は、担架に乗せられて屯営に運ばれたが、基地司令部からは何の達示もなかった。相手が悪い、暴行の水兵を懲しめたごぜん様に、当時いかに権威ある軍隊の幹部といえども、迂濶に手は出せない。しかも官幣社の宮司である。

こんなごぜん様も敗戦後の米軍には勝てなかった。神社の裏山の陣地には一日に何度かの動務交替が行われ、米兵を乗せたトラックが村の主要道を通過した。ご神幸が行われることになった。これは神占によって行われる年と、ない年が決められる慣習だが、米軍占領下に神占はご神幸斎行と出たので、村人を集めて準備を進めたのである。

ところが、米軍司令官の連絡で、米軍のトラック通行の時刻は神前に声はない。ごぜん様の終声が、宵闇の森にひびき渡っただけに向って爆発した。ご神幸を外敵に妨げられる神サマ、一体おがめた祭事関係者は、恐懼か同調かわからぬ複雑な感情で、ごぜん様が神サマを叱る世にも珍しい情景を傍観したことであろう。

神サマはごぜん様に叱られたごぜん様は米軍の進駐と、ご神幸の時刻変更の強制を神サマに訴えて、村民の幸福を祈念する大切な行事が、外敵の武力による否神サマの不甲斐なさによる扣圧を叱った。神サマは叱られた、ごぜん様の村民を愛する心に。国を愛する心に。

そして我が愛児をはじめ幾多の避らぬ同胞を惜しむ心に。

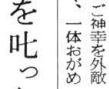
惨たるものである。外人兵が国土の一部を通過するために、伝統の祭事の時刻を変更しなければならないとは。

然しごぜん様はよくガマンした。そして何かの光明を見つめつつ明日の祖国の繁栄を神に祈った。ごぜん様こそ真の神主だった。求道者だった。名もなく富もなく辺陬の神社の神主として、その生涯を終ったが、言うならば恥辱に生きた人であろう。求道なき求道者の清潔な人生を貫いた人であろう。

夜あけまで盃を離さなかったごぜん様の記録、その行状記と言っては粗末だったが、筑前の風色ある神主としての横顔を描き出して、その変哲多きごぜん様シリーズを終ることにする。

宗像談話室

神サマを叱った ごぜん様



県交通安全協会 恒例の祈願参拝

去る一月七日、県交通安全協会一同の恒例の交通安全祈願祭が斎行された。

気候温暖に恵まれた正月とあって、参拝客で神社の境内は賑い続けていた。雑踏する中で会長野田俊作氏を始め一行五十余名が参拝、拝殿に昇殿、今年の交通安全を祈った。

この参拝は三十数年間続けられ今々会の年中行事となっている。協会関係者は次の通り。

会長野田俊作、陸運局、トラック協会、自動車販売業者、自家用車関係、タクシー協会、自動車整備振興会、自動車学校関係者、貨物自動車協会の新聞社、損害保険関係者、東福岡交通安全協会、西福岡交通安全協会、宗像郡交通安全協会関係者、地方からは田川交通安全協会、折尾交通安全協会。

代表者一行は祈願祭終了後、神湊、玄海旅館に於て祝宴を開いた。席上会長の挨拶「この宗像大社は御承知の通り交通安全の神様であり、その御加護を頂いて各自の持ち場々々に於かれて、交通安全の実績を挙げられます様にお願いしたい。

尚今年の目標としては、三悪追放を掲げている。

1、スピード違反
2、酩酊運転（飲酒運転）
3、無免許運転

以上の項目に重点をおいて活動して頂き度い旨の挨拶があった。

続いて当社宇都宮祢宜の挨拶「今や現実の問題として国家、社会は無論のこと、各個人々が考えねばならない時に来ている。こうして皇様方が毎年正月には恒例の行事として当大社に祈願し、心を新たにしてゆかれる事が神の心に叶うものだと信じます。

どうか宗像大社の御神徳のもとに皇様の御活躍を期待しております。」

休憩所新築さる

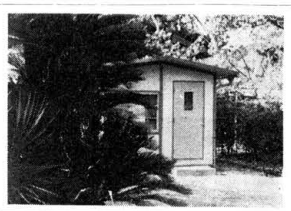
当社にご参詣される皆様に休憩していただく喫煙所の新設は、懸案の一つであったが、このたびプレハブ建築で応急の休憩所が新設された。建坪は約五坪、元旦から十四日迄は祈願の受付所として使用し、以降は一般参詣の方々に利用していただく事になっている。淡いブルーの休憩所は冬暖く、新春の頃には紅梅の香が漂い、秋には社殿のお屋根と名月を仰ぐ処として、皆さ「いこい」の場所となる事を願っている。

祈願を待つ一時、静かな心の安らぎを覚える様な建物を近々将来建設する計画を持っている。

参詣者会昭とも云うべきもので、浴場、安楽室、ティルーム等を備えていて、ドライバーにとっての運転疲れを解消出来る、その様な建物が出来る迄、この休憩所を利用していただき度いと神社では語っている。

右の様な挨拶があり、初顔合せの直会で親睦の一時を過した。

（写真は参拝の同協会員）



社務日誌抄

一月一日　元旦祭
午前六時。高宮祭斎行
門司鉄道管理局長参拝、天候温暖晴天に恵まれ、参拝者すこぶる多し。
二日　新年祭斎行。
三日　新年祭斎行。
小畑国雄備員本日より勤務す。
四日　新出光興産福岡支店長外八名参拝、仕事始めとあって会社関係団体参拝が多く見られた。
五日　福岡ダイハツ、新春交通安全祈願祭、於福岡ダイハツ本社渡辺権祢宜奉仕。本日より国鉄、電々公社団体参拝始まる。
九日　宗像青年クラブ第三回例会開催、於て宗像町村会館、久保宮司、渡辺、太田、本多権祢宜出席。
一二日　四十一年度八幡宗像会新年祭会開催、久保宮司、葦津祢宜、本多権祢宜出席。
一三日　献米報告祭午前十一時より斎行。宇都宮祢宜、楠本権祢宜、山田出仕奉仕、四十余名参列引続き社務所にて鏡餅開きを行なう。自衛隊四師団長外六名参拝。
一五日　成人祭午前十時に斎行、参列者、百八十二名、徳山製油所総務課十五名参拝。
一六日　九州女子大生五十名参拝後宝物館拝観。

正月守り奉斎される
——各交通関係会社に——

新年を迎えて各交通関係の会社から車輌にお守りを奉斎したいとの申込みが殺倒している。これは交通の守護神である宗像大社の御神徳を蔵き、交通に関係する人々が今年の安全と繁栄を願って、各自の車輌に奉斎する事になっているもので、本年度は約六千体のお守りが各関係者に頒布された。

この数は年々増加の一途をたどっている。これは"交通地獄"と称される様に、この事が現実の問題として人々に迫っている事を如実に示すものと思われる。

当社で交通の安全を祈願した由来は古く、五世紀（約一五〇〇年前）から行なわれている。当時は形代（当社宝物館に陳列）というものを作り、これを神に捧げて祈願を行っていたが、時代が流れに従って次第に様式が転化して、現在ではお守を受けるようになったのである。

お守りとは、神に祈願をこめたみしるし（神璽）である。この交通安全のみしるしをつけることは神に交通の無事故と安全とを誓つ事に他ならない。神への誓いと祈りを忘れず運転業務に励んで頂くことを心から願つものである。

尚本年度主なる授与先は次の通りである。（順不同）

西鉄自動車株式会社。
西鉄電車株式会社。
亀ノ井自動車株式会社。
堀川自動車株式会社。
八幡製鉄株式会社運輸課。
日鉄八幡港運株式会社、
対馬交通株式会社。
壱岐交通株式会社。
福岡県自動車専門学校。
防長交通株式会社。
第七管区海上保安庁。
自衛隊第四師団竹松駐とん部隊。
出光興産株式会社。
支店、出張所二十余社。
その他交通関係会社より多数の申込を受けているが省略する。

新築落成、織幡神社の傍
玄界灘と響灘を一望する
割烹　さかもと
宗像郡玄海町鐘崎
電話鐘崎一〇七番

宗像大社御用　綜合印刷
有限会社　大和印刷所
宗像郡宗像町東郷　電話　宗像局2027番　有線277　1番

二月のまつり

一日　月次祭　午前十時
三日　節分祭　午前十時

大寒が終り冬籠りの季節が過ぎて、いよいよ春の仕事の季節に入る。この時機にあたって、厄除けのお祓いをして、一年中の無事を祈る行事、この日の参拝者には大社の福豆を授与する。

節分には、古くから各家庭に於いても、福豆を撒いて「鬼は外、福は内」と唱えて、豆を撒き、自分の年だけ拾う等、各地によって種々な行事がある。

一一日　建国祭　午前十時

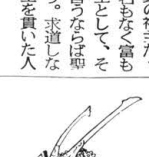
もとの紀元節祭。わが国の建国の起源に思いをいたし、国民としてのつとめを誓って祈る。

一五日　月次祭　午前十時

二月の交通訓

○注意せよ！
事故は日頃の油断から

楢葉の末（四）



宗像四郎氏貞（三十三）

山下半可　作
福田長庵　画

山田の館を襲った二行は、悲嘆に暮れている主君を見ると複雑な気分になってしまうのであった。新しい主君氏貞の安泰を思えばこそ、そして此の度のことが陶入道の厳命であればこそ決行した事ではあったが、吉田飛騨守らとしては、山田後室母子には譜代の恩顧がある。新しい主君が庶腹である為に旧主筋を根絶しなければならぬとは、何とやりきれない事ではあったが、致仕方も無かった。これが乱世の実相であったろうか。

氏貞は悲嘆のうちに此の事を了承した。今の氏貞にとってはとても力及ばぬ事だったからである。

已むを得ない仕儀とは云えど、山田の後室たちの墓所をそのままにして置くことは出来ない。家老の石松、詳要、吉部、吉田らが取り仕切って山田の瑞福寺に丁重に改葬した。後室の法名を栄林院妙秀、姫君の法名を心雲院妙安と称した。墓所は二所に築き、その日は終夜法要供養が営なまれた。

翌朝、法要に参加した家臣らが帰途につく前に最後のお参りに行った。昨日築いた二つの墓が四つに割れていたのである。一番驚いたのは、吉田飛騨守であった。彼は今度の事件の主謀者であった。彼はつくづく思ったのである。

「今、われ山田の怨霊のために殺される。助けよや、助けよや。あら胸痛や、胸痛や」と呻いたのが彼の最後であった。

この事はすぐさま家中にひろがった。さあ大変。「山田の怨霊の祟り」の事は寄るとさわると、人々の噂になった。

飛騨守の妻女が怨霊のためにとりつかれたのは、それから間も無くであった。妻女は夫の飛騨守が非業の最後を遂げたことを知り、戦々恐々として暮していた。思えば今度の事件については、自分も大きな役割をはたしている。弟の峯玄蕃に大事の決行をすすめて迫ったのは自分である。とすれば、必ず何かの報いがあるかもしれぬと思った。

こうしておびえて暮していた或る夜、妻女の枕元に怨霊が立った。それより以来、飛騨の妻女が錯乱した。

「あら胸痛や、われは氏男の後室なるぞ。汝が夫に胸を刺されし苦しみ、今ぞ思い知らするなり」

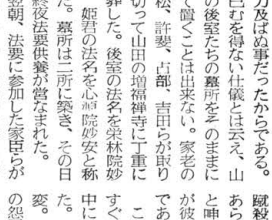
墓側にぼうっと白いものが立った。修法に参列していた飛騨守が、自分の目を疑った。まされもなく自分らの手にかけた後室の姿がそこにあった。丈なす黒髪がおどろに垂れ下がり、じっと飛騨守を睨んでいる。

「あっ」

といって飛騨守がけぞった瞬間、墓を覆っていた大釜が轟音と共に破裂した。

飛騨守はその爆風に吹き飛ばされて倒れた。他の者が駆け寄って助け起して見ると、飛騨守の心臓部に丁度短刀を突き刺したようなな穴があいていた。そして苦しい息の下から

「今、われ山田の怨霊のために殺される。助けよや、助けよや。あら胸痛や、胸痛や」



こういうあられもない事を口走りながら、十余日経って妻女は狂死した。親戚の者が調べてみると、妻女の胸に穴があいていた。

怨霊の祟りは人々を恐怖せしめた。殊に家中の重臣夫妻がその為に非業を遂げたということが、輪に輪をかけて宣伝された。

その上、同様なことが続いて起った。

その年の夏の夜、野中勘解由は夢を見た。その夢が、去る三月二十三日の惨劇をそっくりそのまま見たのである。はっとして目が覚めた彼の目の前に、几帳隔からただよい出た二人の女性の白衣の姿があった。その白い衣裳に鮮やかな血痕が見えた。がばっと跳ね起きた勘解由があたりを見廻した。が、何もない。夢か、現か、と思うう

ちに、どっと疲れが出た。

その日から七日の間、勘解由は熱病にとりつかれ、あらぬうわ言を口走り続けた。彼の最後も吉田飛騨守のそれと同様であったと云われる。

山田事件の主謀者らは、家中の方向を定めた功臣として何れも重く用いられるようになっていた。一味の者らは我が世の春を謳い、反対派の者らはそれを苦々しく思っていた。事が事だけに、是非を論じている場合ではなかった。

積極的に加担した者。消極的に加担した者。積極的に反対した者。

消極的に、やむを得ないと、見て見ぬふりをした者。

家中には百四様の態度があったのである。その何れに対しても、氏貞の治世中に何らかの応報があった。

（つづく）

年年の交通安全を祈って

―境内を埋めた人の波―

続々と参拝団

元日より天候に恵まれた正月祭は十日間を通じて十万人近くの初詣参拝者を数え広大神厳なる神域も人の波、車の波でうずめられた。

色とりどりの車が入れ替り立ち替り神域を出入する。大型観光バスが止る。晴着に着飾った参拝者が車からどっと神門に殺倒する。神社側も職員総動員の上に臨時職員二十人の応援をたのんで万全の体制を整え気持よい初詣になる様心懸けた。

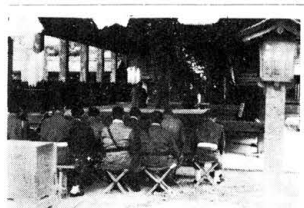
正月三カ日を過ぎると、各官庁、各会社の仕事始めとなる。一日に恒例の如く参拝された国鉄門司鉄道管理局長を筆頭に、各団体の安全祈願を願っての参拝である。この様な団体参拝は正月十五日間を終ってもなお続いている。

十日間を通じての団体参拝者の一番多かったのはやはり国鉄関係者であった。福岡県内だけでなく熊本、佐賀、大分、山口迄及んで各駅から駅長さん、助役さんが引率して来られる。

ある駅長さんの話「毎年のことですが、年が明ければ宗像さまにすぐお参りをしないと、どうも気が落ちつきません。駅員も皆同じ考えのようで今日やっと半交替で参拝しまして気が晴れました」かくして参拝を完り社務所で直会となる。

当社では社務所広間及び清明殿大広間に湯茶の用意をして、百五十名前後の参拝者の時の用意を整えた。直会の希望者を年々増加して、神社と崇敬者との親睦も深められて行く。正月祭に於ける本年度の社務所、清明殿使用団体を昨年と比較すると次の通りである。

	四十一年	四十年
団体数	五十	三八
人員	二千人	千五百人



国鉄関係の団体の中で異色なものとして、国鉄OB会がある。国鉄の外郭支援団体と云えよう。このOB会は毎年五日頃に参拝をされ、国鉄の交通安全業務繁栄を祈願されている。

次に多いのが電々公社関係でその他にも九州電力の各事業所、出

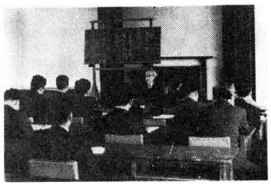
宗像青年会議所 新春例会

客年発足した宗像青年会議所の第三回例会が新春一月九日、宗像町町村会館に於て開かれた。

この日参加した会員は三十余名で、来賓として出光興産門司支店庶務課長、当社からは久保宮司他職員二名が出席した。

先ず開会の辞に続いて代表幹事が新年の詞を述べ、宗像郡に生を享けた我々は郷土発展の為に尽したい、各自の職場と友交関係にがて、この問題意識を高める様に努力して行きたい旨の挨拶があった。

この後、当社久保宮司から、宗像郡が如何なる変遷の歴史を辿って来たか、特に宗像神社との関連に於て約一時間半に亘って講演があった。講演の後、質疑応答があって祝宴に移り、午後四時過ぎ散会した。



八幡宗像会 昭和四十一年度総会

恒例の八幡宗像会新年総会が、去る一月十二日午後五時より、八幡愛宕会館で開催された。本年は西方から温暖な日々が続き、当日も小春日和の上天気であった。参集した会員は六十余名。山路会長の挨拶の後、記念品贈呈が行なわれ、安部兵次(七七才)会員を初め、数名の会員に喜寿、還暦の長寿を祝し、記念品がわたされた。

続いて会務報告があり、昨年二月の新年総会、七月の夏季総会、十月の宗像大社家族参拝など、主なる事業経過が報告された。その後、昭和四十年度の会計報告が

宗像大社宝物館 宝物を訪ねて

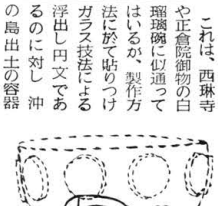
ガラス容器(瑠璃碗)

このガラス容器破片は、厚さ三粍の淡緑色をし、気泡がかなり見受けられるガラス片で、一見、器の糸尻のように思われるが実は、容器の外面である。(写真参照)

この糸尻のような円文は、径約二、八糎、高さ三―五粍の浮出しに型出しされているもので、破片から計測すれば径約一二糎内外、上段に九個、下段に七個の浮出し円文を持つ瑠璃碗と考えられる。

これは、西琳寺や正倉院御物の白瑠璃碗に似通っているが、製作方法がで帖のつけガラス技法による浮出し円文であるのに対し沖の島出土の容器は、型ガラス技法に依るものである。

これ等瑠璃の円文は、遠く近東、欧州発見の珠文瑠璃碗に淵源して



いると言われている。

三彩釉陶器片(一片)

三彩釉陶器とは緑、褐、白の三色を白―緑―白―褐の順に縦縞にほぼこした厚さ五粍の器である。

現在の破片から推測すると、白二〇糎、緑褐各々一〇糎、緑褐各々一〇線からなり、最大径約八糎位の器と同様に、軟質の陶器で淡褐色の粘土質を使用している。当社の重な品々の奉献は物語っている。

三彩器片が正倉院の三彩器にも見られない褐色の鮮やかさからすると、わが国で焼成されたものでなく、唐から船載されたと考えられる。

その他に二彩釉陶器片四ケがある。これは厚さ五粍、径約七・八糎、高さ八粍の素状品の破片で、緑色に白斑を点色した二彩色である。

この神宝の発見により、五世紀頃(約一五〇〇年前)にはすでに朝鮮、中国のみならず、欧州の文化が導入されていた事が実証され、学界を驚嘆させた。それと同時に神島沖の島の神威がいかに広大無辺であったかを古代文化の貴

一刀彫り 馬の干支守り

正月中、社頭で授与する恒例の一刀彫りの干支守りは、本年で、四年目を迎える。何分にも五百体と限定されたものである上、年々希望者も増加し、本年は三ケ日で残数ゼロと云うほどの引っ張りだこの状態。わざくお見えになられて希望される方々、また電話での問合わせの人々にお詫びするのも、職員一同、一苦労と云った状態であった。

素朴な中にも優雅さを持つこの一刀彫りの材質は〝楠〟であり、伊勢市に現存する名工の手による逸品である。本年は〝馬〟であるなされ、議事は無事終了した。

次に当社久保宮司より、大社の新年の模様、また近況などを兼ねて挨拶がなされ、懇談に移った。やがて祝宴に移り、まづ当社からの御神酒に乾杯、談笑の声が会場一杯に響きわたり、総会は盛会裏に終了した。

が、この馬君もっとながめると福々しい顔の中に、なかなかもって愛嬌があって面白い、絵に描くと勇ましい馬が出来上る、これをいざ彫るとなると、非常にむつかしい。馬年は多くの飛躍する年と云われている。この馬君も勇壮に跳躍仕様としている姿で象徴され、その上に穏顔で、体つきも肥えていると云う点、最気回復の年と云われているだけに幸運を運ぶ〝馬〟として、微笑ましい姿ではないであろうか。

町村往来

◇消防車を購入―玄海町は第三分団(岬)に配備する新車を購入、10日午後2時から同町織幡神社で入魂式。

◇離島振興の講演会…10日午後7時、大島村公民館講師は全国離島振興協議会の竹田亘理事。

◇宗像町の成人式：15日午前9時半、河東小学校講堂、ことし成人式を迎えその日は男子百五十六人、女子百五十八人、町は記念品として全員に鏡を贈った。

◇郡身体障害者協議会役員会…14日午前10時、町村会館2階。

◇郡消防協会出初め式…7日午前9時半、福間中校庭。

◇日本水難救護会連合会出初め式…4日午前10時、川端―向田野―炭鉱―鐘崎―江口―神湊―宗像大社32キロメートル。青年団員、高校生、中学生10チームが参加。

◇宗像高校改築、起工式17日午前11時建設予定地。創立50周年(昭和44年)を記念して3年計画でほとんど全面的に改築する。

◇津屋崎武道会納会…22日午後1時、津屋崎小学校講堂。会員の小中学生約百人が参加、演武けいこのあとせんざい会。

◇なかよしこども会が寄金：玄海町田島の玄海小南校舎なかよしこども会の15人は、おこづかいを出し合い、二十百円を『三沢犬火の気の毒な人たちに』と玄海町役場へ寄託した。

◇郡内学校保健給食大会…27日午前9時半、東郷小。優良給食従事者の表彰、給食問題の分科会別討論中村栄養短大川口久子さんの『栄養指導上の問題点』の講演など。

◇玄海町囲碁大会…30日午前9時半、池野小。会費一〇〇円。同町公民館、給与所得者協議会の主催。

◇郡身体障害者協議会役員会…14日午前10時、町村会館2階。

◇宗像町婦人会支部長会…13日午前9時、町役場会議室。41年度活動方針について。

◇玄海町成人式奉祝駅伝：ことし11回め、15日午後1時福田―

(四日本水難救護会連合会出初め式…4日午前10時、

(四日本水難救護会連合会出初め式…4日午前10時、

(四日本新聞より)

新築完成

―玄海の味・生魚料理―

みなと荘

宗像郡玄海町神湊

電話 神湊 五六番

宗像伝説其の五十七 中津宮 二夜三日祭

秋のとりいれも終った旧暦十一月一日になると、ここ大島の農家の人達は揃って中津宮に集まり、その日から三日間参籠をする。今年も十一月二十三日の勤労感謝の日から二十五日まで人々は参籠した。これは大島村の庄屋であった大島弥一郎重高の遺徳を偲ぶためのものであり、二夜三日祭と呼ばれて、すでに三百年以上も続けられている行事である。

話は今から三百三十余年前、江戸時代の中頃にさかのぼる。八代将軍吉宗の治下、享保十七年は大飢饉の年であった。所謂享保の飢饉と呼ばれるものである。前年の冬以来気候が不順で五、六月頃まで長雨が続き、気温もまだ低かったので不作の凶候が現れていたが、加えて伊勢、近江以西の西日本一帯にイナゴの大群が発生し、一夜のうちに稲数万石を食い尽すという猛威をふるい、遂に大凶作の年となってしまった。飢民は幕領六七万人、諸藩約一九九万人にのぼり、筑前国内に於いても当時の人口の四分の一にあたる人々が飢えに苦しみもがきながら死んでいった。宗像郡内ととしての災は免れず、殊に大島は田畑が少なく日常米麦等の糧食はその大半を他村に依存していたがこの大飢饉で他村からの救援を絶たれ、その弊はより悲惨であった。島内安員院に残る過去帳によれば、享保十八年の死亡者数は平年の約三倍に達しているが、この数字からもこの年の惨事の一端が窺われる。

時の大島の庄屋、大島弥一郎重高は、この惨状を見るにしのびず自家の蓄米はもとより、日常の費用を減じて飢え苦しむ村人に分ち与えた。これによって死を免れた人も少くなかった。幸い翌年は平年作に戻り飢餓の苦しみから免れることは出来たが、この一年の大凶作の痛手は大きく、村は疲弊し人々は尚困窮に喘いでいた。

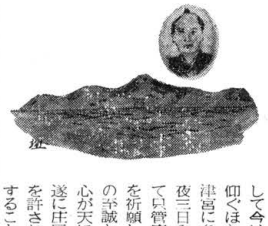
しかし、こうした村内の窮状にはお構いなしに藩庁の租税の取り立ては厳しかった。到底、村に租税負荷の力のないことをみた大島庄屋は、再三藩庁に減税の歎願をした。しかし藩の係役人は一向に聞きとどけてくれない。遂に意を決した庄屋は単身藩庁に赴き直訴に及んだ。封建の世では直訴は御法度であり、敢えてこれをなす者は厳罰に処せられたが、それを覚悟の上で藩主に村の窮状をのべ、租税の減ぜられんことを訴え出たのである。庄屋は捕えられて獄に繋がれる身となった。万一の僥倖を期待した村人も庄屋投獄の報に暗然とした。父とも仰ぐ庄屋の身を案じて人々は歎き悲しんだ。そして今は御神助を仰ぐほかなしと中津宮に参集し、二夜三日の参籠をして庄屋の助命を祈願した。庄屋の誠と村民の赤心が天に通じてか遂に庄屋はその罪を許され旧職に復することを得たばかりか、租税も軽減され村には漸く明るい春が蘇った。

それ以来毎年秋のとりいれの終った十一月に村人は中津宮に参り、神明の加護を喜び、庄屋の徳を慕って二夜三日の報賽の祭を行うようになった。

参籠中行われる祭典に、拝殿に額づいて神職の奏上する祝詞に古き享保の年を思い、庄屋の徳を偲んで感慨を新らたにするのである。

明日の倖を願い、その向上発展につとむべきは勿論であるが、それがともすれば自分だけの利益を追い、他を顧みないという弊に陥りがちな現代の風潮にあって、一身を投げうって村人の危難を救った庄屋の襄奚、庄屋の身を案じて一途に神に祈った村人の心情を偲ぶことも、現代であるが故により意義深いことであるといえよう。

(H)



宗像大社献詠 俳句作品集（三十八）

津屋崎　毛利　夜潮
火明りに鬱汁のもの動くなり

津屋崎　古部　河童
筆立も蛸壺まがい冬館

津屋崎　西住喜三郎
ブルトーザ芯に冬野の枯極まる

津屋崎　井浦　良介
毛毬咽消えゆく路地のしづけさに

津屋崎　勝田　光一
月を得て雪野は母の優しさ持ち

津屋崎　鶴　美津男
潮騒のひびく冬田の道曰し

津屋崎　岩見佳代子
鱸網解く漁師寒波に眼を研がれ

東郷　小野　淡坡
石塁にもまれ荒磯千鳥なく

〃　小野　花居
亡き人を偲びそろろや枇杷の花

厚狭　篠田　南洞
十輩摘むや親子の如きものもあり

献詩

沖津宮島自通神
拾得海庭鎮古新
顕幽一理白雲筆
隣船禅寺作家珍

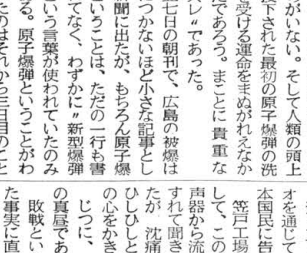
日立と共に五十年（三）

倉田主税会長の半生記

職工の数も激増し、三交替で昼夜ぶっとおしの作業が始まった。主税の生活は、それと一緒に夜も昼も無くなったのである。

最初の納期は一応七月末となっていたが、これは最初から無理な註文であることはわかっていた。陸軍から来ている監督官もそれは良く承知していた。然し、引き受けた以上は一日も早くつくらなければならぬ。また実際においてこの工場でつくる潜水艇が出来上り、戦列に加わって輸送の任務を遂行することは、ただちに日本の戦斗力を強化することになるのだ。それを考えると自分の面子とか会社の面子とかでなく、どうしても間に合わせなければならないと思うのであった。

朝の七時二十分が出勤の時刻であり、すでに重役である主税は、それにしばられることはないのであるが、工場長として彼は一分でもそれに遅れることがなかったばかりでなく、それより必ず五分前に出勤した。いかに戦時中とはいえ、それは随分ケタはずれのやり方であったから、工場の幹部たちもこれには、ささか驚嘆した。夜の八時頃まで工場に残って陣頭指揮をする主税が、一旦社宅に帰ってから、夜中に一度は必らず工場の見廻りにやって来るのである。



家にいるときでも、頭の中は潜水艇のことで一杯なのだ。それは丁度、日立の電線工場で荷引線をつくりはじめたときのころと同じような状態であった。

陸軍は日立の笠戸工場にマルゆ号潜水艇の製造を命令してのち、大急ぎで乗員の訓練を始めた。これもまた陸軍としては建軍以来の出来事である。陸軍の兵隊が船に乗ってこれを動かし、更に海の中に潜るというのだ。それも僅か三、四カ月で訓練を終り実務に就かせるのである。

第一号艇が出来て進水したのは十八年の十月二十九日であった。予定より約三カ月くらい遅れた勘定になるが、軍のほうでもこの時ばかりは文句も言わず、むしろ大いに感謝をしたのである。

十二月八日の大詔奉戴日を期して、マルゆ号潜水艇は愈々試運転にはいることになった。小型ながらマルゆ号は、近代的なスタイルを持つ立派な潜水艇である。いや、スマートといってよいくらいそれは美しい形をしていた。胴体の直径は三米、全長四九・五米、水上航速九・六浬、水中航速四・〇浬、潜航深度百米、乗員二五名、武装としては、しかし三十七ミリ砲一門と十三ミリ機関砲二門をもつだけであった。試運転は無事に終り、主税はじめ工場の関係者一同は安堵の胸をなでおろした。

こうして"陸軍の潜水艇"は笠戸工場でぞくぞくと量産され、その年十二月に一号が船舶司令部に引き渡されたのをはじめとして、次から次に数十隻が納入されたのである。マルゆ号潜水艇数十隻は、陸軍の期待を背負って遠くレイテ海域にまで物資や銃砲弾薬を輸送して大任を果したが、その大半は米軍のために撃沈され、有為の将兵達は艇と運命を共にした。

"レールの上でつくられた潜水艇"、陸軍がつくり陸軍の兵隊が操縦した潜水艇"は、こうして大東亜戦争の末期に、せめてもの希望を託されて誕生し、黙々として海底に消えて行ったのであるが、多くの人は殆んどこの事実を知らないようである。いわんや、それをつくったのが日立製作所の笠戸工場であることも、その仕事を担当して日夜昼のひまもなく働いたのが、主税以下の関係者であったことも知る者はない。

昭和二十年八月六日、その日は広島県庁で生産増強会議が開催されることになっていた。それに出席するため主税は朝食を早めに済ませて、前日徳山燃料廠に来たついでに来宿中の長男、海軍中尉の博順と一緒に停車場へ向かった。その頃は、しょっちゅう空襲警報が鳴っていたが、別に気にはならなかった。そんなことはすでに馴れっこになっていたからだ。その日も朝から警報が出たり解除されたりして、汽車が宮島を出て大竹に入ろうとしたとき、突然非常に強大な爆発音が車内の人々の耳朶を打った。「これはいけない」とっさにそう感じて座席から起ちあるのと同時に、キーンという金属性の音が彼の耳もとをかすめ去った。それ以上は進めないことがわかった。広島までは僅か十五キロもある。"やれやれ"と言いながら、主税は汽車から降りて駅のホームに立った。ふと広島の方を見ると、大空高く妙な形の入道雲がひろがっているのが見えた。それは巨大なキノコのように見えたが灼熱の大陽を反射して白っぽく輝き、ところどころに気味の悪い色をした斑点が、へばりついたようにみえたのであった。しばらくすると一天真黒くなり、はげしい雨降りとなった。その雨は変にどす黒くにごったような色をしていた。汽車が行けないとなればどうしようもない。バスもタクシーもないのだから広島まで出向くことは不可能となった。電話連絡しようとしたが、広島電話局は全く応答がなかった。機関車で駅長が広島に連絡しようとしたが、まるっきり見当がつかなかった。すでにその時、広島は"死の町"と化していたのである。

一時間の列車運転がなかったとしたら、主税は広島に着いていたにちがいない。そして人類の頭上に投下された最初の原子爆弾の洗礼を受ける運命をまぬがれえなかったであろう。まことに貴重な"スレ"であった。

翌七日の朝刊で、広島の被爆は眼につかないほど小さな記事として新聞に出たが、もちろん原子爆弾ということは、ただの一行も書かれなく、わずかに"新型爆弾"という言葉が使われていたのみである。原子爆弾ということがわかったのはそれから三日目のことであった。「原子爆弾を使うとはひどい」激しい怒りと、祖国の悲運を悲しむ痛切な思いとが火花のように主税の胸のなかに入りまじった。追いかけるように長崎の上空でも悪魔の手は原爆投下のスイッチを押した。「小倉もあぶなかったが、沈痛きわまる陛下の酒調は心を小さくしむ」

じつは、昭和二十年八月十五日の真昼であった。

敗戦という、全く予期しなかった事実に直面して、日本人の大半は呆然としてしまった。"全く予期しなかった"というと、或いはウソになるかも知れない。沖縄の陥落以後まもなくの人々が"もしや"という懸念を持ちはじめていたことは事実だ。然し、現実にそれを恐れていたものにぶつかると、やはり呆然となるのが普通の人間である。

（文責　養父　守）

（つづく）

宗像藪庵先生百話

ルマ・パンジャン

南方華やかなりし頃

宗像太郎坊

ルマ・パンジャンという言葉は「長い家」という意味で、一つの長い廊下に沿って部屋が幾つも列んでいる。憲兵という奴は悪い奴で、本当に軍規を守るのがかわいそうとする時に呼び止めて説諭すればよい。それをさと上らせておいて、済んだ出て来る所を逮捕する。そして自分の点数をかせぐのである。自分達は陰で大概、ユーラッシャン（合の子）の内妻を囲っていた。このことは戦後抑留されているとき、憲兵で合の子から差入れして貰っている者が多いことでわかった。さて、ルマ・パンジャンで、蓮田中尉の終るのを廊下で待っているとボーイが廊下を歩きながらちょっと、立止って壁に身を寄せて中を覗くような恰好している。おかしいなと思って後で行って見ると各部屋毎に壁に小さい覗き穴がつくってある。じーっと覗いて見ると、赤い光線の薄暗い部屋に、ぼーッと運田中尉の二人の世ならぬ秘密の姿が眼に映じてきた。女の方は穴のあるとは前から知っているらしく、しょちゅうそれを気にしていた。ボーイの奴、時々あっちこっちの部屋を覗って、一回の料金で二回乗車のないように見て廻っているのであった。

日本軍人は穢いよれれの汗臭い服を着ていたが、何ういうものか、ゆく国々で女にもてたものであった。スマトラでも一時は、日本男子を知らない女は気がひけるところまでいった。どこの家をノックしても成功したものであったが、どんな女が出てくるかは、宝くじみたいなもので、会ってみなければわからない。ある時、この家には美人がいるだと思ってノックすると若い男が出て来て「ワタシ・ポリシー（警察）・イモート・ゲッケイ」ときた。こりゃいけねえと逃げたのであったが、後で考えてみると、うまいといったものである。日頃、妹を保護するためにこういう言葉を考え、練習していたらしい。まさに一本やられた形である。

（一頁よりつづく）

門司　久保　晴
浄闇や雪の八代嶺たつてころろころと朝田鶴のとえ

朝町　井上陽之助
わがさとにこち吹く風もあげそめてむかしのまゝの春は来にけり

吉武　原田　リノ
夕焼もうすくなりつつ暮れてゆく田圃は寒しバス待ちそれば

名島　久保　房江
あでやかな袂もちそえみたらしを汲む乙女らの声の明るき

香椎　織田　橡雨
はつもうで心あらひし真こころに神をろがめば神はおはすを

コロラド　浦野　薫
背景にロッキー山の連りて隣り家囲む樹氷きらめく

南郷　中村　幸
食糧をもらへぬ猶ものあればけげん声になきをり我いねし日を

東郷　藤崎　辰子
おそ秋の軒に忘れし風鈴のかすかに一つ夜は雨ふしも

遠賀　長畑　房江
枝刈られ二ぶ太く自立つアカシヤの手鏡に写り秋暮れにけり

庭すみの葉ふるひし柿の木の枝に義虫一つ時々ゆるる

名島　久保　房江
初がまの花びら餅の色あわく松風さえし部屋の静けさ

宗像　小野角次郎
スモッグの神定の空に田鳥様次々の事故救ひ給へる

〃　小野　花居
年の瀬のデパート買物人波をおしつおされつ一日過ぎけり

東郷　藤崎　辰子
木枯風の過ぎたる朝け池の面に泳ぎ緋鯉の色あざやかにして

〃　立石ろせの
われらの神話尊と朝ら

武丸　立石　昇
あな天晴れあな面白やあな手伸し

大川　武下　一郎

私の神道（一）

幡掛正浩

神道とは何か、ということを定義しようとすれば、色々な言い表わし方出来るだろう。その一つとして、私はこのように言ってみたい。

神道とは天皇（皇御孫命）の御天職に神習い、それをあないゝ（扶翼）まつる生活である－と。

それでは天皇の御天職とは何であるかと言えば、私は、それは神話を地上に再現遊ばすことだと考える。

我々の信仰からすれば、神国日本は天照大御神の極めて深遠なる御神慮によって開かれた。西晋一郎博士の表現を借りれば「天地開闢如国家建立」である。此の神ながら国家に於ける大皇の御天職を明示するものは、天照大御神の御神勅にほかならぬ。

第一は皇孫に賜わった宝鏡奉斎の御神勅であって、

吾が児、この宝鏡を視まさんこと、当に吾を視るが如くすべし。

と、当に吾を視るが如くすべし。与に床を同じくし、殿を共にして以て斎鏡と為すべし

（日本書紀・巻二）

第二も同じく皇孫に賜った皇孫統治、宇祚無窮の御神勅

豊葦原千五百秋の瑞穂国は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治せ。行矣、宝祚の隆えまさんこと、当に天壌と窮りなかるべし。（右同）

第三は天児屋命・太玉命に下したまわった御神勅の中にうかがえるものであるが、

吾が高天原に所御す斎庭の穂を以て、吾が児に御せまつるべし

以上三つの神勅が端的に天皇の御天職を示していると思う。

第一の神勅は、神皇一体の祭祀の原理であって、天皇が直に天照大御神の御神位を継がせ給うことを示している。

このような天皇の御天職に神習い、あないまつる生活が神道であるが、試に神社の原理とも言うべき天津神籬・天津磐境の神勅（）、第二の神勅は、その様な天皇、源平盛衰記の言葉で言えば「伊勢大神宮入替らせ給」うところの天皇による統治（従ってそれは単に形而下の統治に尽きぬことを注意）を示し、第三の神勅は天上の稲種を持ち下って地上の蒼生を食養したまうこと、宣命にいわゆる「食国天下の政」（従ってそれは単に精神界の主宰だけでないことに注意）を言らせたまうべきことと、

吾は則ち天津神籬及天津磐境を起樹て、当に吾孫の為に斎い奉らむ。汝天児屋命・太玉命、宜しく天津神籬を持ちて、葦原中国に降りて、亦吾孫の為に斎い奉れと勅りせれてあり、愈々その意義を明確にするのである。これは我々臣下の代表ともいうべき天児屋命・天太玉命に対して下されたものであることを思うべきである。

ここで、天津神籬（神社）を起樹て斎い奉るとは、後の世の祝詞に所謂「皇孫尊の大御命を手長の大御命に帰属にいわい奉る」ことであるが、その「吾孫」とは、「天日嗣高御座」（賞命）

（かなづかい　責編担部）

記三神勅を自らの御使命御天職として照臨まします天皇である。果してそうであれば、ここに言われた「斎い奉る」（神社祭祀）ということは、天皇が天皇として愈々御宗成遊ばす（天照大御神における遊ばす）ことへの「ホメことば」でなければならぬ。これが神社祭祀の根本第一義である。

そういう天皇＝天照大御神によって治しめされる（精神的にも、生活的にも）事の中に敷い（安心、或は完璧感と言い換えてもよい）を見出すのがもとと神道の信仰であった。（主は豊饒を約束する）

（かなづかい　責編担部）

我楽苦多告知板

○元旦の社頭では、昔の友人によく出会う日頃から忘れっぽいのを美徳の一つにしているB、挨拶するヤツの様子からきっとガキの時分の友だろうと当りをつけて「あいつは元気だな」「あいつは仲々やるねえ」つい調子が出すぎて「とっちであの野郎はクタバッタそうだよ！」とたんに「馬鹿野郎！それはおれだ」　シェー

○たくあんの美味しい戴き方　先ずコップに冷水とたくあんを一皿用意して、熱めのお風呂に入っていただきます。程良く休が温まった頃にお風呂に入ったまゝ、たくあんをポリポリとやり、お冷やをコクコクとお飲みになります。おいしゅうございますよ！。

胡文虎

シンガポールにもう一人忘られない人がいる。それは胡文虎という中国人。彼は南洋華僑中、第二番目の富豪だった。シンガポールに来た時は、苦力をやって、自分の腕一本で叩き上げた立志伝中の人である。彼はなんで儲けたかというと、売薬である。この薬というのが、当るも八卦、当らぬも八卦の八卦丹と、万金油と頭痛粉の三つ。これで南洋二位の金持になった。八卦丹ってのは、板チョコそっくり折って食べる咳止めである。万金油というのは日本のメンソレータムの強力なものと思えばよい。痛いところに塗る。また腹痛には、コップ一杯の湯に、マッチの先にちょっと、これをつけて溶せて飲む。頭痛粉というのは強力な下熱剤である。わたしはデング熱に罹ったことがある。この病気は四十度くらいの熱が出て非常に食欲が減退する病気であるが、きめ手の薬はなかった。この時、私はこの頭痛粉を一包飲んだら熱はがた落ちで平熱になった。この時に御飯を食べておく。するとまた二時間はかりたつと、どんどん熱が上ってもとの高に戻るとのことである。